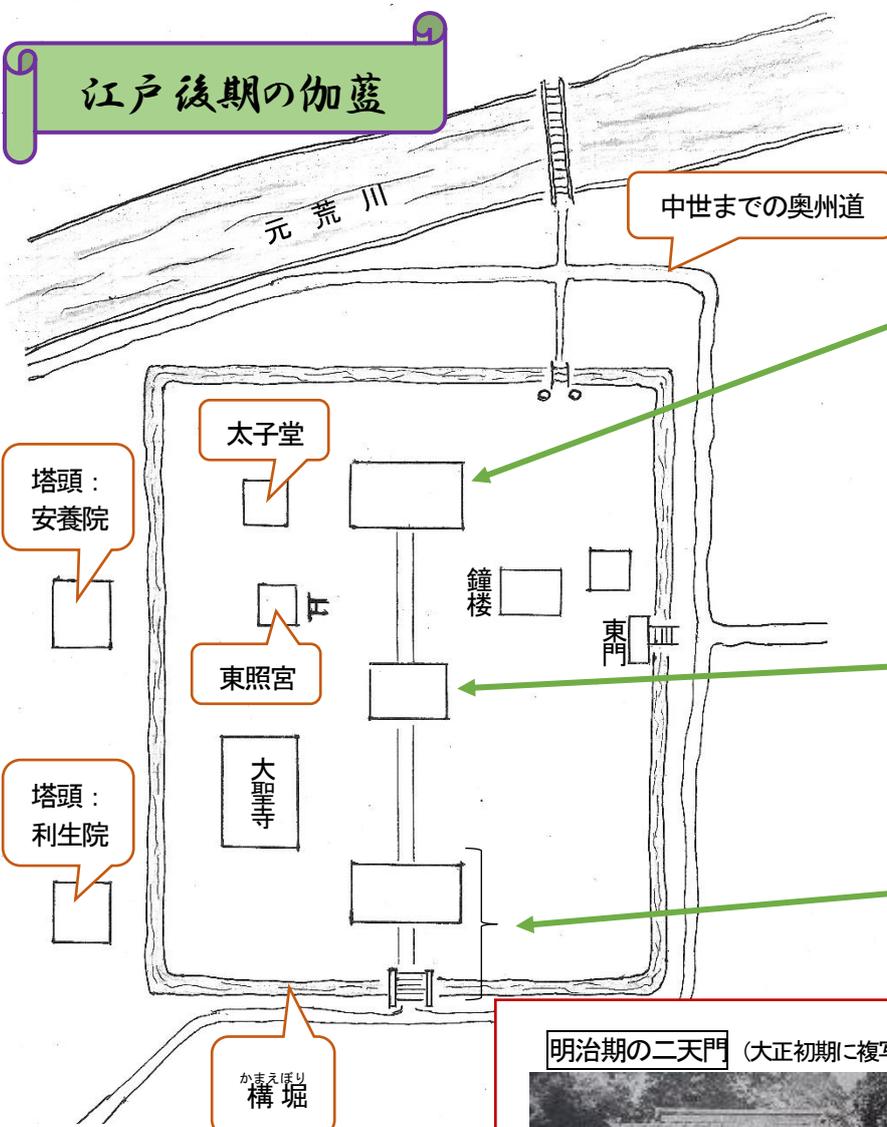




暖冬で雪害が少なく暮らしやすい反面、今年の農業では、とりわけ稲の生育には雪解け水が欠かせないので、心配な面もあります。またインフルエンザや新型コロナウイルスの流行も大いに懸念されますが、冷静に対応したいものです。

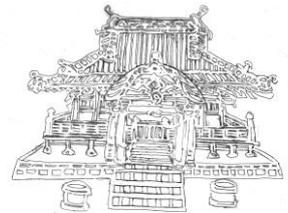
往時の姿を偲ぶ 古刹 大聖寺

今月3日(月)、大相模の大聖寺では郷土出身の大相撲力士を招いて盛大な節分会が執り行われました。大聖寺は創建の頃から近世に至るまで「不動堂」と呼ばれ、その建物を中心とした伽藍(がらん=僧侶が仏法の修行をする神聖閑静な場所。寺院の境内。)でした。「新編武蔵風土記稿」(19世紀前半、化政期に武蔵国の歴史や地理、文化を調査して編纂されたもの)と当寺院に保存されている江戸後期の伽藍を描いた版木「武州大相模真大山不動尊景全図」とを比べて、古の伽藍配置の様子を下図のように表してみました。

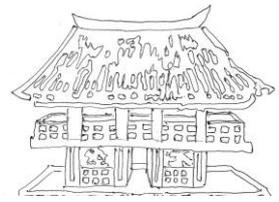


版木写真からトレースした図

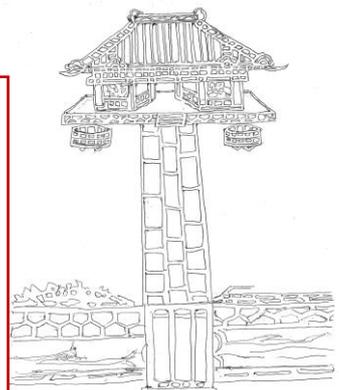
不動堂



二天門



仁王門



明治期の二天門 (大正初期に複写)



四天王のうち持国天と毘沙門天を祀った「二天門」は、現在はありません。

当寺院は「不動堂」が本堂なので、平面図中の「大聖寺」にはその管理をする別当寺院としての役割がありました。図中に

示した堂宇以外にも、経蔵、講堂、庫裡、地藏堂などが伽藍内にありました。構堀で囲まれた伽藍は東西、南北それぞれが200m前後あったと思われます。塔頭（たちゅう：付属の小寺院）は図中の安養院や利生院のほかにもありました。

三体のお不動様

さて、ご本尊の「不動明王」を直接拝することができるのは酉年の9月です。あと9年後です。安置されている御厨子の前には“お前立”と呼ばれる昭和2年作の同型の不動明王がありますので、それまではこのお像の前で御厨子のご本尊を想いながら拝します。

ところで御厨子の中には2体のお不動様がおられるようで、その内の1体はかつてのお前立だったそうです。そういうわけで、本堂には3体のお不動様が私たちを見守ってくださっています。



お前立の不動明王

天平勝宝二年（七五〇年）、東大寺大仏造営のために諸国をめぐっていた良弁（ろうへん）僧正が不動明王を彫り、それを祀るために開いたのが不動堂（大聖寺）と伝えられています。

板碑は何を語る？

大相模地区、**東方西口遺跡**の発掘が一段落して先月現地説明会が行われました。ここには中世から近世までの遺構がありました。遺跡発掘のいくつかのポイントを考古学専門の職員に尋ねました。

Q1：遺跡がそこにあると、どうしてわかるのですか？

→ 予め住居址などの設計図があるわけではありません。今回の東方西口遺跡の場合は、①元荒川の自然堤防上であること ②旧東方村名主屋敷の南側（名主の敷地）であること などから遺構の存在が考えられ、試掘して確認しました。

Q2：その後どのように掘るのですか？

→ 表土を取り去って遺構の一番上層が現れたら、そこはたいがい赤茶けた色ですが、ジョレンという道具を使って水平に少し削ります。土の色の違う部分があったら、そこは遺構の可能性があるのでさらに掘り下げていきます。そうして住居址や井戸などが検出されます。断面の地層はとても重要で、年代や埋まった過程がわかります。



国土地理院ウェブサイトの空中写真(1949.1.10)に加筆

自然堤防の範囲

東方西口遺跡

板碑の出土状況：今回はこの他に焙烙（ほうろく）、小刀、香炉などが出土しましたが、中世〜近世初頭のものと思われる。

Q3：今回出土した遺物の中にあつた“板碑”について説明して下さい。

→ 板碑は中世の供養塔です。今回は複数の板碑が井戸に投棄された状態で出土しました。その中に「文明十七年（1485年）」の碑文があります。旧東方村中村家の家譜（家系図）によれば中村家は太田道灌の家臣で、後に農民となったそうです。文明十八年には道灌が暗殺されましたが、この板碑と投棄はその後の中村家と何らかの関りがあるかもしれません。



被供養者「妙阿弥権尼」：「べつ」
という人物かは不明

「文明十七年」



出土した漆器（江戸初期？）



多くのシルバー人材センターの方やボランティアの方が参加されました。